

治療対象となる高齢者が増加していることが関係していると思われまます。私は主に後天性の心血管疾患および成人期の先天性心疾患を対象として幅広く治療してまいりましたので、複雑あるいは困難とされてきた症例でも積極的に対応させていただきたいと思っております。

特に取り組んでまいりました臨床と研究は、虚血性心疾患に対する外科治療です。近年は冠動脈ステント治療が進歩したため、バイパス術を受けられる症例は重症冠動脈病変の症例に限られています。そのような症例は糖尿病、慢性腎臓病、脳梗塞、慢性呼吸器疾患などの全身性の疾患を合併していることが多く、より重症な症例となっております。その様な症例に対し出来るだけ低侵襲であり、かつ長期的に有効な手術を行うことを目標に研究してまいりました。具体的には人工心肺装置を使用しない Off-pump CABG、びまん性冠動脈狭窄に対する On-lay patch grafting、内胸動脈などの動脈グラフトを多用したバイパス手術であります。これらは国内外でも行われている施設は限られ、熊本大学の特徴の一つとして今後も発展させていきたいと考えております。また、弁膜症に対しても TAVI（経カテーテル大動脈弁治療）を含めた低侵襲治療や僧房弁形成術なども積極的に行っていきたいと思っております。

す。さらに、大動脈解離や胸腹部大動脈瘤など複雑な症例も数多く経験してまいりましたので積極的に対応して行きたいと思っております。

以上のように心臓血管外科学は臨床を中心とした中から卒前・卒後を通じた教育と研究を行い、高い能力を持った専門医を育成するとともに医局全体を活性化し、日本を代表する心臓血管外科学教室を作っていく所存でありますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

熊本大学大学院生命科学研究部生体微細構築学分野教授就任のご挨拶



大学院生命科学研究部
生体微細構築学分野教授
若山 友彦

平成二十七年四月一日付で、熊本大学大学院生命科学研究部生体微細構築学教授に就任いたしました。

私は、平成六年に金沢大学医学部を卒業し、直ちに金沢大学大学院医学研究科に進学して井関尚一教授（金沢大学医学部解剖学第一講座）の指導を受けました。当時の教室の研究テーマは、「種々の器官・組織の発生、生後発達、増殖、分化

において重要な役割を演ずる生理活性物質の発現、局在およびその制御」であり、組織化学のテクニクを駆使して様々な研究テーマを一つ一つ解決しました。井関教授には、手とり足とり、まさに一から組織化学の理論と実践を叩き込まれました。この経験は、自分が後進の指導をする上でのモデルとなっております。こうした研究テーマの中から、「細胞接着分子による精子形成の調節機構の解明」というライフワークの研究テーマにたどり着きました。精子形成に必須である新規の細胞接着分子 CADMI (Cell Adhesion Molecule-D) を同定し、報告するという幸運にも恵まれました。精子形成の調節因子としての細胞接着分子の役割と意義は、ほんの一部が解明されたに過ぎません。熊本大学においてもこの研究を続ける自分の手で解決する所存です。

私は、組織学の教育を担当しています。組織学では、顕微鏡レベルで観察できる構造と機能を関連付けて人体を理解します。医学の発展にともなって組織学において学生が学ぶべき内容も増加しているため、道半ばで心が折れそうになる学生を多々見てきました。そのような学生を脱落させることなくゴールまで導くことも私の役目だと考えています。時には叱ることもありますが、学生がコツコツと努力をし続けるように褒めることを心掛

けています。私の思い描く理想の組織学教育は、実物を理解できる本物の組織学の知識・技量を学生が身に付けるような教育です。十年前よりも確実に複雑になつた組織学を系統的に理解しやすく教えることが私の使命です。学生には分かるまで繰り返し、辛抱強く教えていくことをお約束します。組織学は、学生と接する機会の多い科目でもありますから、学生のやる気、関心、学習態度にも注目して、個々の学生の様子にも目を配っていききたいと思います。

肥後医育振興会をはじめ関係する先生方のご理解とご協力をお願いするとともに、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

